『歴代宝案』訳注本第二冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会教育長　仲里長和

琉球と中国との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史の形成に大きく関与してきました。一三七二年、中国の洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明国の建国を告げ、入貢を促してきました。これに応えて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易、正式の国家間交渉が開始されたのです。以来、明治初年にいたるまで約五〇〇年間にわたり親密で長い琉球と中国の交流の時代が続きました。日本、中国、韓国、東南アジア諸国とほぼ等距離にある地理的条件を生かし、琉球は中国との進貢貿易を軸にして、十四世紀末からおよそ二〇〇年にわたり、朝鮮国やシャム、パタニ、マラッカ、スマトラ、パレンバン、スンダ、ジャワ、安南等の国々と交易を重ね、東アジアの一大貿易国家へと発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えなどの形で、外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの筆写文書や控文書も破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代宝案』第一集四九冊が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されました。この第一集には、一四二四年から編集時点の一六九七年までの外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の往復文書は、『歴代宝案』第二集二〇〇冊・第三集一三冊として編集され、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が編集されています。これらの『歴代宝案』のうち、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれる王府本は所在が不明です。また、久米村本は、一九三三（昭和八）年に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。

『歴代宝案』は、沖縄の対外通交貿易史及び外交交渉史を解明するうえで第一級の同時代的史料であり、当時の東アジアの動向をもうかがい知ることができる貴重な史料です。幸いなことに、旧県立図書館に移管された久米村本から影印本と写本が数種作成されて残っています。沖縄県は、平成元（一九八九）年度から、これらの現存する影印本や写本を元に『歴代宝案』の編集事業に着手し、平成三（一九九一）年度から刊行を開始しました。この編集事業では、現存する影印本、写本及び関連史料を所蔵する国内外の機関の協力を得て、

諸本を校合・校訂して、原本に近い校訂本を作成し、一般に普及するための訳注本等を編集、刊行する計画です。これにより今後の歴史研究に資することを目的としています。

訳注本は、校訂本の漢文本文を全文読み下し文に改め、必要に応じて語注やルビを付したもので、『歴代宝案』の理解を補佐する目的で全十五冊の刊行を予定しております。平成八年度は訳注本第二冊を刊行いたしました。本冊では『歴代宝案』第一集巻二三から巻二七の符文（身分証明書）、巻二八から巻三五の執照（渡航証明書）、巻三六・巻三七の南明末期の弘光・隆武皇帝の文稿、巻三九から巻四一の移彝回咨・移彝咨（朝鮮・東南アジアとの往復文書）、巻四二の移彝執照、及び巻四三の山南王併懐機文稿を収録いたしました。時代的には洪熙元（一四二五）年から康熙三五（一六九六）年の間の文書であります。琉球の大交易時代を証明する貴重な文書です。

本年度の訳注本の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会及び沖縄県歴代宝案編集調査委員会の御尽力、御協力を得ました。また、訳注を和田久徳先生に担当していただきました。心から感謝を申し上げ、刊行のことばといたします。

平成九（一九九七）年三月